文化財発掘Ⅵ

―幕末・近代の出土文字資料―

京都大学構内における発掘調査の結果、古代以降の文字資料がたくさん出土しています。出土文字資料とは、土器や陶磁器・瓦等に、文字を墨書・釉書き・印刻したものなどにあたります。そのような出土文字資料のなかでも、今回の展示では、幕末・近代という、新しい時代のものをテーマにしています。

全国各地の遺跡からみつかった文字資料のうち、とりわけ注目されているのは、古代の木簡や墨書土器である、といっても過言ではありません。古代の文献史料は、現存するものが少なく、それゆえに、新たな史実をもたらす出土文字資料は、研究者の間で、たいへん重要視されています。

しかしながら、中世以降のものであっても、遺構や遺跡の性格を明らかにする、ひいては、地域の歴史を考えていくためには、けっして軽んじることができないといえます。

この度は、そうした点を念頭に置いたうえで、幕末・近代の京都大学構内を特徴づける、土佐藩白川邸･第三高等学校･京都帝国大学･清風荘などに係わる出土文字資料を中心にして、展示をおこないました。そしてまた、文献史料等を参照することで、それらの文字が意味するもの、それらの文字からくみとれる事実などについて、とかく考察をめぐらせています。

以上のような出土文字資料等を通じて、おのおのの歴史を深く理解していただければ幸いです。あわせて、今回の展示を一つのきっかけにして、新しい時代の出土文字資料にも広く関心が向けられ、ひいては、それに係わる研究が盛んになることを大いに期待しております。

なお、この度の展示から、文化財総合研究センターの職務を昨年４月に引き継いだ、大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター　京大文化遺産調査活用部門が企画しています。

「大学」の円形意匠（本部構内出土）

１．土佐藩白川邸

北部構内には、江戸時代の最末から明治時代の初頭にかけて、土佐藩の屋敷、すなわち白川邸が所在していた。以下に、その沿革について、簡潔に述べる。

土佐藩は、幕府によって大坂湾の警衛を命じられたのをきっかけにして、文久元年（1861）４月ごろに、摂津の住吉、現在の大阪市住吉区東粉浜（こはま）２丁目に陣屋を完成させた。その造営にあたっては、国元から木材・石材などを調達したことが、文献史料からおさえられる。

ところが、慶応２年（1866）９月に、先の任務が免じられた結果、同年の冬ごろに、住吉陣屋の建物を白川村の地所に移築するにいたった。こうして設置されたのが、白川邸である。

それは、中岡慎太郎を首領とする陸援隊の屯所などとして使われた後、明治３年（1870）２月５日付の太政官布告をふまえたうえで、同年の６月初旬から程なくして、とり壊されるにおよんだと考えられる。

北部構内からは、208 地点をはじめとして、白川邸に用いられていた、刻印銘を有する瓦などが大量にみつかっている（図１）。そのような刻印銘の大半は、土佐の瓦屋の屋号ないしは商標に該当する。

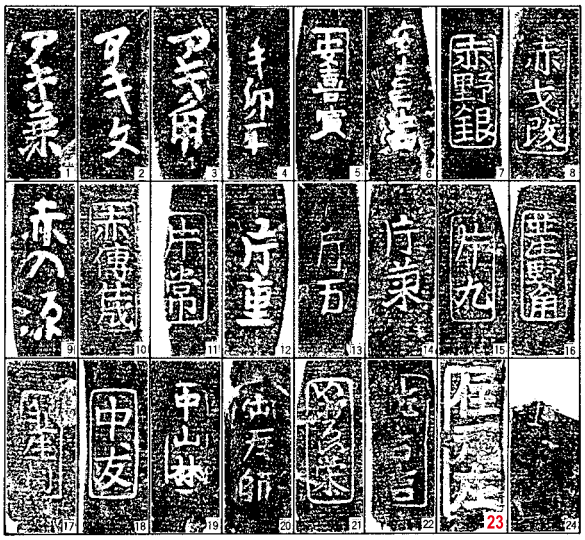
つまるところ、土佐で作られた数多くの瓦が住吉陣屋で使われ、その後、白川村の地所に運搬されたことが、それらの出土によって明らかになったといえる。

ただし、208 地点の２点の「住瓦庄」（図１の 23。なお、写真２を参照）、今回展示している 109 地点の「谷川丸市」（写真３）という刻印銘瓦に対しては、注意を払わなければならない。

なぜなら、前者は、「住吉の瓦屋の庄兵衛」を省いたもので、摂津の住吉において作られた瓦、後者は、大阪府泉南郡岬町多奈川谷川（たながわたにがわ）の辺りで生産されていた、いわゆる谷川瓦にあたると目されるからである。

もとより、それらは、製作場所などを勘案すると、住吉陣屋ならびに白川邸の屋根瓦の一部であったと理解してよかろう。

けれども、住吉陣屋の建設当初から、そのような瓦が用いられていたのかどうか、修繕・増築の際の購入といった点を含めて、吟味していくのが不可欠であるといえる。



１　208 地点出土の刻印瓦銘

２　「住瓦庄」
病院構内 436 地点出土。白川邸の屋根瓦の１枚であった可能性が存する。

３　「谷川丸市」

２．本部構内

本部構内の歴史を振り返ると、その嚆矢は、第三高等中学校の移転に求められる。

大阪城の西に所在していた第三高等中学校は、京都におけるいくつかの候補地のうち、本部構内の地に建設されることが決定し、明治 22 年(1889) ９月には、開校式を迎えるにおよんだ。その後、明治 27 年６月に公布された高等学校令により、第三高等中学校は、第三高等学校に改組され、同年９月に授業が開始されるにいたっている。

しかしながら、第三高等学校の敷地と建物などは、明治 30 年６月に創設された、日本で２番目の帝国大学である京都帝国大学に引き継がれることになった。

本部構内からの出土文字資料としては、277 地点と 296 地点のものを出陳した。

前者の展示品のうち、10 点の磁器染付椀に関しては、見込みに「大学」「大医」の円形意匠をもつものが７点と１点（写真４・５）、「総長」という文字をもつものが１点存する（写真６）。

くわえて、底部外面には、「文斎」「耕山製」「万珠堂製」「松好精製」「万珠」という製造元名、「物理」「機械」「本」「ＴＳ」という学科名などが記されている（写真７・８）。

なお、「大学」の円形意匠を有する陶器土瓶（１頁）の底部外面には、漢字２字の墨書が認められるけれども、墨が薄くなっている部分が多く、確定することができない。

いっぽう、後者については、十五年戦争に係わる遺物、すなわち統制番号と「隣組」の歌がみえるものをとりあげた。

統制番号とは、太平洋戦争期とその前後において、陶磁器に対して使用されたものであって、それぞれが公定価格品であることを示すために、各生産地の工業組合が決めて、個々の生産者に割り振られたとされる。

たとえば、「岐 396」の場合、「岐」は、その統制番号を定めた岐阜県陶磁器工業組合連合会のことを指す（写真９）。

また、「隣組」の歌とは、芸術家の岡本太郎の父である岡本一平が作詞したもので、昭和 15 年(1940) ６月に、はじめてラジオで流され、同年の 10 月には、そのレコードが発売されるにいたっている。

隣組は、昭和 15 年９月に制度化された、10 戸内外からなる隣保組織であって、同年 10 月に結成された、官製国民統制団体である大政翼賛会の末端組織に相当する。

したがって、年月が一致するという点をふまえると、「隣組」の歌の売り出しと大政翼賛会の発足とは、密接な関連を有していたと考えられよう。

４　「大学」

５　「大医」

６　「総長」

７　「物理」

８　「機械」

９　「岐 396」

３．吉田南構内

吉田南構内には、もともと第三高等学校が所在していた。明治 30 年（1897） ６月に、京都帝国大学が創立されると、第三高等学校は、本部構内の地を離れ、東一条通を隔てた南側の地に移転して、校舎を新たに設けるにいたった。

自由の校風で多彩な卒業生を輩出した第三高等学校は、昭和 24 年（1949） ５月に、新制京都大学が発足すると、それと合わさって廃校となった。そして、吉田南構内には、後に教養部となる吉田分校が設置されるにおよんだ。

吉田南構内の 261 地点からは、口縁部外面に「第三高等学校」と書かれた磁器染付椀が出土している。くわえて、見込みに、長方形枠囲みで「大正四年十一月十日」、円形枠囲みで「大典□（奉）祝」、高台すぐ上に、漢数字の「三」をなかに入れた桜花の刻印銘を有する軟質施釉陶器の皿がみつかっている（写真 10）。

よく知られているように、大正４年（1915）11 月 10 日に、大正天皇は、京都御所で即位儀礼を実施した。また、桜花一輪＋三は、明治 27 年（1894）に制定された第三高等学校の徽章にあたる。

よって、これら事柄を勘案すると、この皿は、大正天皇の即位儀礼を祝うために、第三高等学校によって作られたものであったと判断されよう。

いっぽう、399 地点からは、緑色の二重線をめぐらし、「京都帝国大学寄宿舎」と記された「美濃窯業製」の硬質磁器の皿や椀などがとりあげられている（写真 11・12）。

これらに関しては、大正２年（1913）に、学生寄宿舎とともに、その食堂と賄（まかない）所が本部構内より移転・新築されていることから、それらで使用された食器であったと理解しえよう。

「美濃窯業」、すなわち美濃窯業株式会社は、大正７年８月に発足した、岐阜県瑞浪（みずなみ）市に所在する会社である。当初は、煉瓦部のみであったものの、大正９年のはじめに、製陶部が新設されるにいたった。

製陶部は、社名・社章等のマークが個々に入った、特注品である集団給食用食器などを製造し、東濃地方における陶磁器の最大工場となった。

美濃窯業株式会社の昭和６年（1931）のカタログには、「硬質磁器」の「最近の主なる御得意先」として、「京都帝国大学医学部附属病院」とともに「京都帝国大学学生寄宿舎」が、同じく昭和 13 年の食堂食器のカタログには、「主ナル納入先」として、「京都帝国大学」があげられており、注目される。

しかしながら、昭和 18 年６月の戦力増強企業整備要綱によって、同年 10 月には、その生産が中止され、製陶部は、閉鎖されるにおよんだ。

なお、１点の磁器湯呑みの体部外面には、「楽友会館」と書かれている。現存する楽友会館は、学生寄宿舎の南に位置し、大正 14 年（1925）に、京都帝国大学創立 25 周年記念事業の一つとして、同窓会館として建設されたものである。

10 「大正四年十一月十日」「大典□（奉）祝」

11 「京都帝国大学寄宿舎」

12 「美濃窯業製」

４．病院構内

病院構内に関しては、展示品とのつながりに絞って、説明を加える。

明治 32 年（1899）７月の医科大学の設置に伴って、その 12 月には、附属医院本館における診察が開始される。附属医院本館は、東構内の南部に位置し、その北側には、明治 32 年に第１・第２病舎、同 34 年に第３～第７病舎、同 35 年に第８病舎が、いずれも平屋で、かつ東西対称の形で建造されるにいたった。

くわえて、西構内の北東隅では、大正５年（1916）に、賄（まかない）所と洗濯場が新しく築かれている。

病院構内の出土文字資料としては、366・384・436 地点の附属医院に係わる遺物を出陳した。

まずは、366 地点のものをとりあげると、なかでも留意すべきは、「京都陶器株式会社」と書かれた磁器製の漏斗（ろうと）である（写真 13）。

京都陶器（株式）会社は、明治 20 年（1887）５月に、紀伊郡深草村福稲（ふくいね）に設立された、陶磁器の製造をおこなった会社である。

当初は、国外への輸出に努めたけれども、業績の不振に陥った。そこで、国内向けの生産などで経営の挽回を図ったものの、功を奏しなかった。

明治 36 年３月 25 日付の『京都日出新聞』によると、京都陶器会社は、「一昨年以来業務休止中なる」こと、同年４月４日に「臨時株主総会を開き」「任意解散」することなどが記されている。

こうした事柄と附属医院の設置時期を考え合わせると、先の漏斗は、明治 32･33 年ごろに、注文・納入されたものであったのがうかがえる。

なお、１点の磁器椀の底部外面にみえる「陶器会社精製」（写真 14）の「陶器会社」については、京都陶器（株式）会社に一致する蓋然性が高い。

つぎに、384 地点のものに目を向けると、藍色・朱色の「医院」や「大学」の円形意匠をもつ皿・椀・重ね物等が、まとまってみつかっている。

藍色の「医院」の円形意匠のなかには、印判によらず、手書きのものが２点みうけられる。後者の底部外面には、「松好精製」「万殊堂製」とあって、製造元を知ることができる。

しかるに、前者の印判によるものには、それがいっさい記されておらず、したがって、そうした点をめぐっては、課題が残されているといえよう。

384 地点は、先に触れた賄所があった辺りに位置し、このような事柄をふまえると、緑色の二重線をめぐらす「美濃窯業製」のものとともに、そこから廃棄された食器である公算が大きい。

最後に、436 地点のものは、井戸ＳＥ１からとりあげられている。漆喰で作られたそれは、附属医院で使われていたもので、そのなかから、「京都帝国大学薬局」と書かれた乳鉢（写真 15）など、それに係わる多くの遺物がみつかっている。

陶製の湯たんぽには、「病□（壹）」「□（病カ）三」という墨書・朱書があって（写真 16）、それらは、第１病舎・第３病舎のことを指す可能性が高い。

第１病舎は、昭和 15 年（1940）に、その一部が西構内に移築され、また、第３・第５・第７病舎は、昭和 11 年までに、第２・第４・第６・第８病舎は、昭和 13 年までに、とり壊されている。

よって、それらを含む大量の遺物は、昭和 10 年代前半に投棄されたと推量される。

13 「京都陶器株式会社」

14 「陶器会社精製」

15 「京都帝国大学薬局」

16 「病□（壹）」

５．田中関田町遺跡

田中関田町遺跡のなかに位置する 455 地点は、京都大学女子寮の建て替えに伴って、発掘調査がおこなわれたところである。

機械力や人力といった掘り下げによって生じる、不要となった土の置き場所を確保するため、発掘調査は、図 17 の赤線から南側・北側の順に、２回に分けて実施された。前者を南区、後者を北区と称する。

北区の西半は、近代に広く掘削されていて（大攪乱と呼ぶ）、埋め戻された土のなかには、たくさんの陶磁器などが混じっていた（写真 18）。

大攪乱から南区にかけては、今回展示した、大正元年（1912）10 月 31 日発行の『京都地籍図』（京都大学工学部・大学院工学研究科吉田建築系図書室所蔵）などから、西に隣接する清風館・清風荘と同じく、明治時代末以来、久しく住友家が所有していたことが判明する。

まずは、清風荘をとりあげると、それは、江戸時代後期に設置された、徳大寺家の別邸である清風館を前身とする。

藤原氏北家閑院流の徳大寺家は、摂関家に次ぐ家柄である清華家の一つにあたる。その当主であった実則は、明治 40 年（1907）８月に、住友吉左衛門友純（春翠）に清風館を譲渡した。それに伴って、西園寺公望の京都における控邸とすることが決定される。西園寺公望は、その当時、内閣総理大臣を務める有力な政治家であった。

かような人物の別邸とされた理由に関しては、徳大寺実則・西園寺公望・住友春翠の３名が、徳大寺公純の子で、兄弟であった、という点があげられる。つまりは、次男の公望は、清華家の一つである西園寺家、その弟である春翠は、財閥として成長する住友家の当主を継いだのであった。

17　455 地点の平面図　縮尺 1/700
一点鎖線内は京都大学女子寮の敷地

18　455 地点の北区全景（表土・大攪乱など除去後　南西から）

住友家に譲られて以降、明治 44 年から、新館（清風荘）の建設がはじめられ、その主屋は、大正元年の末には、ほぼ完成するにいたった。

ここで、話題を近代の文字資料に移すと、北区の大攪乱ならびに南区からは、それが少なからずとりあげられている。出陳したものは、それらのうちの一部である。

そこで、大攪乱の「京都府立療病院」（写真 19）と南区の「京都府立医大附属医院」（図 20）について、説明をおこなうと、京都府立療病院は、明治 15 年（1882）11 月に、京都療病院から変名したものである。

その後、上京区第十二組梶井町（現在の上京区河原町通広小路上る梶井町）にあるそれは、明治 36 年 6 月に、京都府立医学校から京都府立医学専門学校へと改称されるに伴い、その附属施設、すなわち京都府立医学専門学校附属療病院となった。そして、大正 13 年（1924）10 月には、京都府立医学専門学校附属療病院は、京都府立医科大学附属医院へと改名されるにおよんでいる。

したがって、以上のような推移をふまえると、「京都府立療病院」の磁器は、明治 15 年 11 月から明治 36 年 6 月の間に、「京都府立医大附属医院」のガラス製品は、大正 13 年 10 月以降に作られたことがうかがわれる。

さらに、大攪乱の「京陶」（写真 21）に着目すると、それは、前述した京都陶器（株式）会社を略したものである可能性が存する。

もし、そうした見方が正しいとすると、「京陶」の磁器は、明治 33 年以前にこしらえられたことが推測される。

先に触れたように、455 地点のうち、北区の西半の大攪乱から南区にかけては、明治時代末以来、清風館・清風荘と同様、住友家が長らく所有していた。

このような点と上記した事柄を勘案するに、大攪乱からみつかった近代の遺物の多くは、清風館、南区のそれは、清風荘に係わるものであった、と解するのが一案として浮上することになろう。

とりわけ後者に関しては、「□（清）風荘」と墨書された陶器片がみつかっていて（写真 22）、つまりは、そうした想定を補強するものと判断される。

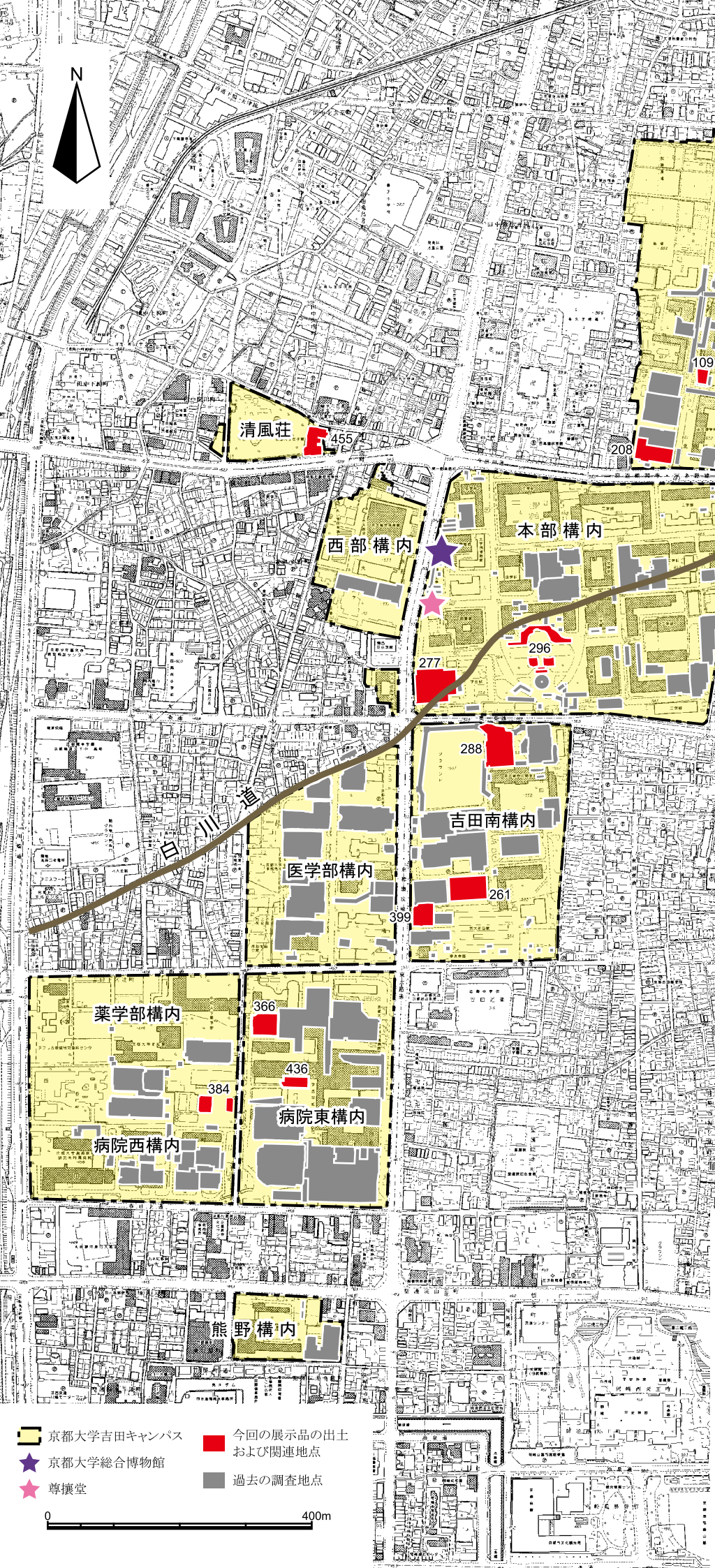
かかる見解が妥当か否かはともかく、455 地点から、京都府立医科大学関連の遺物が多く出土している、という点をめぐっては、検討を深めていく必要があろう。

19 「京都府立療病院」

20 「京都府立医大附属医院」（ガラス製薬瓶）

21 「京陶」

22 「□（清）風荘」



京都大学総合博物館　2019年度特別展

文化財発掘Ⅵ

―幕末・近代の出土文字資料―

2020年２月19日～2020年４月19日

2020年2月19日発行
編集・執筆　笹川　尚紀
発　　行　　京都大学大学院文学研究科附属
文化遺産学・人文知連携センター
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/ces-top_page/